

あ い さ つ

稲化会会長 高宮 信夫

したたるような新緑のあふれる季節となり、稲化会の行末を考えながら挨拶を書くこととなりました。昨年もう少し触れましたが理工学部80周年事業として、大学院棟と総合研究センター棟の新棟建設が進行中です。昨年会長挨拶を書いてからちょうど1年を経過して、私の研究室の窓外の光景は一変しました。目の前には巨大なビルの骨格が既に出来上がっていて、周囲を布で囲ってあるので中の様子はよく見えませんが、工事の物音からは順調な進展状況のように思われます。平成5年2月完成の予定で4月までに移転を終わって使用開始の運びとなります。

ところで、この総合研究センター棟の2階に校友関連施設ということで278㎡のスペースが確保されました。それは理工学部の施設増強のたびに校友を中心とする篤志家に寄付を仰いできたこと、また総合研究センターの性格から大学と社会との連携を重視する施設であること、すなわち校友を中心とする一般社会の企業、他大学、官公庁諸機関との共同研究の場を目指しているからです。また卒業生と大学との絆を一層強め理工学会の活性化を計ろうということでもあります。

具体的には校友関連施設の内容は2つの部分に分かれます。一つは明治時代に理工学部創設にあたって最大の貢献をされた竹内明太郎氏を記念して名前をつけたラウンジ風の部屋を設けることになってます。竹内明太郎氏は故吉田茂元首相の長兄にあたる方で、明治時代に政財界に通用する有力者だったということです。もう1つの部分は稲化会のような

会が理工学部の各学科毎に出来ているので、これらを総合した理工学会の事務スペースとして使われます。稲化会は理工学会の一分会という位置づけですので、当然このスペースの中に稲化会の専用で使用できる部分があります。

完成後は稲化会の役員会や小人数の会合にも使える予定です。また現在は稲化会の実務は学生理事諸氏の奉仕に負う所が大きいのですが、そのための事務机や戸棚も用意される予定です。100人前後の会合なら会合の性格にもよりますが、校友関連施設ではない部屋も使える可能性があります。

実を言いますと、建物の方の予算とは別に、この校友関連施設の備品内装等に関しては、理工学会で募金をして工面することになっています。この問題に関して稲化会として負担する金額は30万円と決まりました。

化学科の諸先生と御相談の上9人の先生が1人1万円ずつ寄付して下さい、他の21万円は稲化会の会費として集められた金額の中から割いて計30万円として寄付しようということになりました。この実に関して会員の皆様の御諒解を得たいとおもいます。

以上のような現状ですが、化学科も創設以来20周年を間近に控えておりますので、記念式典を行おうという話が出ています。まだ時期を確定していませんが、新棟のお披露目を兼ねて平成5年4月以降の早い時期に行うことになるかも知れません。当然各位には御案内を差上げますので、その節は御出席下さい。

〈助手随想〉

決断と実行

河野正規

今年の4月から早稲田大学助手に着任した河野正規です。私は松本和子教授のもとで錯体化学の研究を行っていて、金属蛋白質であるニトロゲナーゼ酵素の機能的モデル錯体を合成しています。

大学に入学してから早9年目、研究をはじめて6年目になります。最近、自分が心がけている事を書きます。日常生活は判断、決断、実行の繰り返しです。研究に限らず、すべての分野に共通して言えることですが、いかに的確に状況を判断し何をすべきかを決断する。自分の判断にもとづいて出た結論を実行する。決断する時の選択肢には、YESかNOの2つである。しかし、YESかNOかを決めることは、大変難しい。なぜなら明確な根拠が求められているからです。研究では、その過程がすべてであり、そこが曖昧であると先に進めないわけです。判断するためには、多くの知識が必要となります。その時重要なことは、目で見て感じた事実にも忠実に判断することです。また、実行することつまり手を動かすことは化学の原点であり、自分の器の大きさを決めるものであります。研究室での生活はそのためのトレーニングの場みたいなものですが、学部の時普段からそのことを意識して生活していれば良かったと思います。

入学したかと思うとあっという間に4年生になり、進路を決めるという重要な決断が待っています。私自身も進路に関してかなり悩んだ時期がありました。何か分からない事や聞きたいことがありましたら気軽に声を掛けて下さい。青二才な私ですが、これからも宜しくお願いします。

博士号を取得して

根本修克

早稲田大学に入学して10年目、そして理工学部化学科の気風に触れることができる研究室配属を経てから7年目を迎えております。今春、博士(工学)の学位を授与され、光栄

なことと感謝の念にたえません。これも高宮先生をはじめとする良き先生方、研究のうえで、また日常生活においてさまざまな御協力を頂いた諸先輩、同輩、後輩に恵まれた賜と考えております。現在も学生気分がほとんど抜けていない助手として化学科に勤務させて頂いております。

大学生生活をふりかえってみますと、学部3年次までは、本業をおろそかにしたつもりはありませんが、本当によく遊びました。友人にも恵まれ、ただ楽しい日々を送ることができました。研究室に配属後は、確かに辛いと思うこともなかったわけではありませんが(でもほとんどありませんでした)、学部3年次以前よりも楽しいと言うよりは充実した日々が送れたのではないかと思います。これは、化学科が小人数からなる学科であり、研究室間の垣根が低いという特徴に負う部分であったと思います。つまり、ある意味では恐ろしいと思うこともあります。研究室の垣根を越えてさまざまな場で(日常あるいは酒宴の席ということもあるでしょう)、先輩、同輩、あるいは後輩がどのような研究に従事しているのかなど、さまざまなことが見えたり聞こえてきたりするという事です。ことの良し悪しは別として、人というのは結構弱い部分を持っていて他人の行動に影響されたりしてしまうことがあるものだと自分にはよく思います。自分の周辺に強い向上心を持っている人がいれば、刺激を受けたりするでしょうし、逆に、同時に甘えた部分が見えたりするとお互いの傷をなめ合うような状態に陥ることもありうるのではないかと思います。自分の場合、先輩、同輩、あるいは後輩にも向上心の強い人間が周辺に多かったということが幸いでした。このような環境の中で得られた友人というのは、宝であるとの底から思います。しかし、どちらの状態に傾くかは本人の考え方の問題であり、化学科の長所を生かすも殺すも本人次第なのではないかと思います。大学院へ進学する学生が最近非常に多いということは喜ばしいことと思います。大学院生(特に博士過程)が、自分に与えられたあるいは自分で計画した研究を行うことは当たり前のことです(当たり前というのは、優れた成果を示せばそれに越したことはありませんが、決してそのような意味ではありま

せん)。それと同時に、賛否はあるものと思えますが、同輩や後輩にそしてときには先輩ですら刺激を与えられるような立場を要求されるものだと考えています。このようなことを考えつつ自分は大学院生活を送ってきたわけですが、残念ながら自分の未熟さのために、100%実行することはできなかつたと反省にたえることはありません。

学位取得は、確かに身に余る光栄なことですが、これは1つの節目であり、また1つのスタート地点であると考えています。今後は、より一層の努力が必要とされるでしょうし、化学科という温室で育った自分があらゆる面で試されるのも今後であると考えています。

化学科の今後のより一層の御発展（後輩諸君にかかっていると思います）を心よりお祈り申し上げます。

「博士論文題目」

ポリシロキサン誘導体の合成と機能

日浦英文

私は、昨年の3月に化学専門分野で、高橋博彰教授の御指導のもと、博士号を取得した日浦英文です。今年度から化学科の大学院は独立したので、私と高宮研の根本君は、早稲田大学の化学科からでる最後の工学博士となるはずです。まずは近況報告をします。現在、私は、あの現物支給で有名な NEC の基礎研究所にいます。NEC 基礎研究所は筑波学園都市内にあり、周りには数多くの企業や国立の研究所が集まっています。今は、NEC の CM（昨年）にも出演した（経費削減？）エブソン・トーマス氏のところで、大学院時代とは少し趣の異なる研究をしています。最近では高橋研時代のようなレーザーも使わず、顕微鏡を通してカーボン・ナノチューブと、にらめっこしています。御存知の方も多いと思いますが、カーボン・ナノチューブとは、一昨年前に発見された非常に極微な構造を持つ針状のグラファイト結晶で、最近やはり発見されたばかり（少し古い？）の C₆₀ などのフラーレンとともに注目されている炭素の同素体です。去年筑波にやってきて間もなくの頃、煤だらけになりながら、ナノチューブの大量合成法を、エブソンさんやアジャヤンさん（ちなみに今年の1月28日号の Nature の表紙は彼の仕事です。）たちと見つけ、やっと、実

験に使える量を手に入れることが出来るようになり、最近、ぼつぼつと面白いことが分かってきました。近い将来、何かの形で世にできると思うので興味のある方は読んでみて下さい。

さて、本題の博士号を取得しての感想に移ります。本当のところ、他の博士号取得者の方々が、稲化会誌にどんなことを書いていらっしたか、全く記憶にない（読んでいない？）ので、どういった内容を書いたらいいか皆目見当が付きません。というわけで、最近、“研究”について考えることを少し書きます。博士号取り立ての若造の戯言と捨て置いて下さい。さて、最近では、日本の研究レベルは多くの分野で世界のトップクラスだと言われています。確かについ昨年の暮れの Science で特集されていた“日本の研究”によると、日本の研究者の論文数や論文の引用件数は、多くなってきているそうです。論文の数はさておき、引用件数が多いのは、その論文、すなわち、研究内容が基本的で、新規なものだからと考えられます。これは別の言葉でいえば、“独創的”と言えるのではないかと思います。しかしながら、いざ、某学会などに出かけて講演を聞いていると、何と“人真似研究”の多いことか、嘆かわしくなってきました。中には、どこかの国の研究者の独創的研究を、さも自分がその分野を切り開き、開拓したかの如く話す“偉い”学者もいます。あんまり書くと、“level 1”の私は、すぐにも“dead”になるので止めます。現在の“独創”と“人真似”の2つのギャップはどこから来るのか良く分かりません。とにかく、これから“研究”者の道を歩む方々は、常に自問する必要があると考えます—果たして自分の“研究”は、人真似ではないだろうか—と。

「博士論文題目」

時間分解共鳴ラマン分光法による励起分子の構造とダイナミクス

研究室紹介

◇井口研

朝9時50分研究室に着く。鍵を開け中に入り空気を入れ換える。ガスコンロ(先生がおっしゃるには、我が研究室唯一のガス器具)でお湯を沸かす。

朝10時~10時半、研究室の方々の登場。まずB4の質問君。B4でありながら、他の研究室でも一部有名。一見の価値あり(?)。次にM1の大江さん。量子研を通じて、唯一のM1である。院の授業中ひたすら孤独と睡魔との壮絶な戦いを展開している。M2の馬上さんは名前の三段活用をお持ちである。もう一人のM2の吉崎さんは、様々なパズルの問題を持ってきてくださる。今年、宮崎研から来たD1の立川さんは、学院の非常勤講師をしています。新歓コンパの際、馬上さんと連携して私に見事な攻撃をして下さったありがたい人です。そして井口研を陰に陽に支え続けて下さる小林さんと鈴木さん。この二人に相談すれば、まず問題は解消することうけあい。

井口先生の御登場は10時20分頃。毎朝必ず一番初めにお飲みになり、午後になるとたまに私たちに御自分の経験など色々な話をして下さいます。

んで、授業があったりゼミがあったりして4時半頃先生がお帰りになる。更に私たちは勉強を続ける。そう、井口研には実験がない。(だから質問君はここにいる。)つまり、井口研の活動は本と論文とコンピュータとの戦いである。大江さんの机の上には、大きな強力わかもとが置いてある。何でも去年プログラムのバグの原因が一週間もわからずその時以来、協力わかもとがお友達だそうである。それ程熾烈な戦いなのである。理論研が暇などという誤解は改めていただきたいものである。

「卒業論文題目」

大江親臣 厳密対角化法によるt-Jモデルの電子状態

北里健二 一次元ランダムポテンシャルによる散乱

鈴木里史 C₆₀ FULLERENEの電子状態

平井恵美 陽電子を含む系についての量子モンテカルロ計算

◇石原研

今年の石原研の特徴は、狭い!! 狭すぎる。8人が7.5坪(たたみ15枚分)の空間にひしめき合っている。ただし、それはドラフト・高圧プローブ・五台の机・乾燥機・その他モロモロの物体を考えに入れられないでのお話し。実際は2坪もないのではなからうか?

この2坪の空間にいる8人の男達を紹介していきます。

先ず、石原先生。噂では毎年授業が上手になっているとか。又、一部情報筋の話では、非凡な「切れ者」だそうです。確かに核心をついた一言は良く飛び出します。(例: I 弁当に対して「貝毒が入っているんですよ。’)又、研究室にいない人でもその切れ味の凄さは、「無機A」の合格ラインの切り方の豪快さからも想像できるでしょう。

次にM2の方々。伊藤さん。頼れる「兄にいい」という感じを持っておられる方です。タマもハヤク、フォークでトドメとか(高木談)。次いで平野さん。親切な先輩です。陸上競技の他、ブロックをまるで生きものの様に扱う事も特技に持っています。おつぎはM1の方々。伊藤(秀)さん。この方は必殺仕事人並に沈着冷静。とり乱してる姿を見た事はありません。M1のもう一人の方、近藤さん。二年生には実験のT.A.としておなじみですね。レポートはきちんと書きましょう。!!

ラストにB4の3人です。孤高のライダー高木君。「俺の生きざまにあわない。」が座右の銘です。飲み会の王者の笹本君。(くわしく知りたい人は石原研 or 松本研まで)実験後、立つ鳥後をにごしまくりの私(高橋)は歩きながらリズムを取ってます。以上B4が3人。ここまでが一応石原研の8名です。最後に客員学生として出席簿上に松並さんを加え、石原研は本日も非常に狭い空間で活動いたしております。

P.S. 忘れてましたが、石原研は無機錯体の反応速度論をやっています。

「卒業論文題目」

新井庸子 ホウ酸とヒノキチオールの錯形成反応機構

伊藤秀明 フェニルボロン酸とクロモトロー
ブ酸の錯形成反応機構
近藤祐一 白金(IV)錯体の置換反応

◇伊藤(紘)研

我々、伊藤紘一研は、構造化学研究室という分野に属しており、主に物質の構造、とくに表面吸着構造について研究しています。具体的には、SHGを使ったLB膜の研究、赤外分光法を使った超高真空下の表面の研究、電気化学の時間分解ラマン分光法、および液晶の研究です。

研究室の特徴は、合成をあまり行わないので、空気がとてもきれいで、しかも、今年からクリーンルームもでき、さらに住みごこちが良くなりました。また、先生を含め8人という比較的小じんまりとした構成で、1人1つの机を持ち、研究室が広く感じられます。

以下、研究室の顔ぶれを紹介します。まずドクター1年のF井さん。彼は、スーパードクターという称号にふさわしく、朝早くから夜おそくまで、きっちりはたらいています。しかし、家庭をもったのでは? とうわさされ、このごろは早く帰ります。マスター2年は、3人いて、M園さんは、勉強家で、いろいろなことを知っています。しかも、いらんことまでよく知っており、もちろん、Hな話もよく知っています。Y本さんは、今年3か月間、アメリカに研修に行きます。W鳥さんは、夜行性で、午前中は、あまり姿を見せません。近ごろ手に入れた情報によると、小・中学生に人気があるそうです。マスター1年は、T野さんだけで、ついに、この前、実験しているところを見てしまいました。感動しました。ちなみに、彼の家には電話はなく、速達もしくは、電報で連絡をとります。B5はF山さん1人で、登校拒否児という、うわさがちらほら、のんびりしていて、マイペースな人です。B4は私1人で少し肩身のせまい思いをしながら、たくましく生きています。こんな、我々をあたたく、見守ってくれているのが伊藤先生で、学生に負けないくらい、いや学生以上にエネルギーでダンディーな先生です。

「卒業論文題目」

丹野淳二 液晶のラマン分光法による研究

山澤直見 時間分解共鳴ラマン分光法による
ナフィオン膜修飾銀電極表面にお
けるヘプチルピオロゲンモノラジ
カルカチオンの形成過程の研究

◇伊藤(礼)吉研

伊藤礼吉研究室は、化学科の中で唯一51号館12階に研究室を構えているという特異性のために他の研究室に比べてその実像がなぞめいている感があります。実は、当研究室に配属されて2ヶ月近い現在でも私にもよくわからないのですが、とりあえずメンバーを紹介しましょう。

伊藤礼吉先生は、学生の自由を尊重なさる大変度量の大きい方です。当研究室の自由な雰囲気は、他の人々からはしばしば誤解をうけるのですが、かえって何かしなくてはならない、という気になるものです。

OBの齊藤さん、森さん、笹金さんは忙しい仕事の合間をぬって研究と我々の指導に励んでおられます。これらのすばらしいOBの方々がいらっしゃることも当研究室のすばらしい点の一つだと思います。

D1の高田さんは、とてもやさしそうでありながら、「我道を行く」方だそうです。週に一度量子力学のゼミをして下さいます。

M2の相賀さんは、頭脳明晰な方でM1にして学会発表をなさり当研究室に1つの歴史を刻まれました。第2量子化のゼミをして下さいます。

やはりM2の中嶋さんはとても教育熱心な方で、ありとあらゆるゼミをしてくださり涙がでるほど感謝しています。研究対象も幅広く「京大に追いつき追いこせ」をモットーにがんばっていらっしゃいます。量子化学のゼミをして下さいます。

そしてB4は、何かと忙しいらしい志賀と私、後藤の2人です。

当研究室では主に分子軌道法を用いて分子の電子状態を計算し、これを基に分子の外場に対する応答、分子間相互作用といった分子の諸問題の理論的研究を行っています。

65号館と離れているため何かと不便なこともあるのですが、静かな環境は理論的研究にはとても適していると感じる今日このごろです。

「卒業論文題目」

- 木下浩一郎 XNO およびXON (X=H, Cl)
の光励起過程に関する理論的研究
小林利哉 塩素化ポリエチレン (CPE) の塩
素分布
高橋靖彦 TDHF 近似による原子・分子の励
起状態間の遷移確率の計算

◇ 高橋研

だんだんと朝晩の冷えこみが厳しくなってきた。あれ? 「研究室紹介」の原稿の締め切りって5月末だったような気が……という声が、骨身につきささるような頃、これを書くことになった。でも、これは仕方のないことであって、やっぱり、どうにもこうにも、ああで、こうで、それで……明日から早稲田祭らしい。

にもかかわらず、早稲田祭にもかかわらず、我が高橋研では、時間分解共鳴ラマンスペクトルの測定に励んでいる。私たちって本当に早大生?? という嘆きの気持ちとは裏腹に励起分子はナノ (10^{-9}) 秒という時間単位で変化してしまうのである。

それにしても、研究室生活も△ヶ月が過ぎて、この頃は平凡に毎日が過ぎていってしまう。化学科恒例の野球大会では次々と優勝候補にあたってこてんぱんだし。何か面白いことでもないかなあと思っているところに、貴花田と宮沢りえの婚約! あれには、化学科でも誰もがびっくりしただろう。誰よりも、兄の立場としては、どんな心境ですか、高橋先生? (一部で若花田に似ているという噂が……)

という訳で、我が部屋は、若花田を筆頭に、家財道具を運び込もうかどうしようかと悩むD3のYさん、何とかギャグのグレードを高めようと必死のD1のSさん、今日もこの漫才コンビ健在! M2のUさんとEさん、昔からファンが多いと聞くOさん、そしてタイという国を心から愛するMさんら (M1、B4の方、書けなくてごめんなさい) が、次の九州場所に向けて日夜しこを踏んでいるのである。でも次の優勝は今度こそ阪神だよ、きつと。

「卒業論文題目」

- 市来玲子 Carbazole の基底状態及びカルバ
ジルラジカルのラマンスペクトル
木村 央 2-(2', 4'-dinitrobenzyl)-pyridi
-ne (α -DNBP) の時間分解共鳴
ラマンスペクトル
黒田崇仁 N, N, N', N'-Tetramethyl-p-
phenyl-enediamine の S^1 状態の時
間分解共鳴ラマンスペクトル
野田善宏 C-Phycocyanin の共鳴ラマンスペ
クトル

◇ 高宮研

A.M.10:00……ゴキゲンな $\dot{B}\dot{G}\dot{M}$ の流れる高宮研の朝が始まります。一步踏み入れたなら活気に満ちた (雑誌・コミックに満ちた?) 雰囲気を感じることができるとでしょう。体力に自信があれば何とかなる! という先輩方の言葉を信じて高宮研のドアを叩いたB4の3名を加え、今年のメンバーは高宮先生を含めて7名で構成されています。それでは1人ずつ紹介して行きましょう。

B4の一番手T君はバレーボールのサークルに所属しており、彼のセンスの良いギャグが高宮研をより一層明るく楽しくします。

M君はかつて“超多忙の男”と呼ばれ、彼はまたイベント大好き人間です。しかし何故彼はあんなにタフなのでしょう? そしてテニス科に属し、サラダバーの大好きな私Uの3人です。(ライチ男の異名を取る筆者のエピソードを聞きたい人は、今すぐに高宮研へDash!!)

M1のIさんはそのお人柄の為友人感覚で接してしまうのですが、我々B4の面倒を見てくれる有難い先輩です。ちょっと顔色が悪く疲れているように見えるのは私だけでしょうか? 次にD1の長井さん。筋の通った鋭い意見にただ感心するばかりです。(居酒屋でのジャンケン踊りは wonderful!!)

最後に化学科一のホームランバッターで組頭である助手根本氏と、強力なスケッチで、東京工芸大 (東工大?) 講師のA部氏もお忘れなく。彼らの飲みは生半可ではない。(当研究室には手線マップなど数々の貴重なコレクションがあるが……うーん、これは不思議だ。疑問を持ったままでは今晚は帰るこ

とが出来ない、ということは、徹夜だ。とうしょう。)

我等が高宮先生は、来客が多く今年も多忙な日々を送られています。

おっと忘れていました。高宮研では、高分子(主にポリシロキサン)の合成とその特性について研究をしております。膜から始まり、触媒、液晶、光化学にまで及んでいます。興味のある方は、是非遊びに来て下さい。その他夏のゼミ合宿、バーベキュー大会などイベントも盛り沢山!!

「卒業論文題目」

- 井原 学 ピリジンペンダント型ポリシロキサンを配位子とする銅(II)錯体の物性
沖野亜弓 フルオレン骨格ペンダント型ポリシロキサンの合成

◇多田研

多田研には、先生、M2、M1、研修生、B4の計10人がいます。

多田先生はとても良い人です。どう「良い」のかは先生に直接会ってみるのがよいと思います。

M2のIさんは誰よりも早く研究室に来て誰よりも遅く帰ります。M1、B4の尊敬の的です。

M1のNさんは才色兼備、歩く姿からはあふれるばかりのオーラが輝き出る、とっても素敵な先輩です。

M1のMさんは一見ぬぼーとしてますが、実はとても几帳面な人で、机の周りはいつもしきれいです。

M1のYさんは化合物を鍛えるのが得意で、彼の作ったものは光にも熱にも強く、決して分解しません。毎日一緒にジョギングしているという話です。

Miss Maria is a brilliant girl who has been here as a research student from De La Salle University, Manila, Philipin. She is now researching natural products chemistry.

B5のMさんはおっとりとした外見からは想像できませんが、実はヘビメタ、エレキ小僧です。

B4のK・K君はとても普通です(本人談)。
B4のH・K君はラフです。体は大きいです

が動作も大きいです。只今、多田研電気屋となっています。

B4のS君は、とてもやさしい、背の高いおにいさんです。

以上10名は補酵素 B₁₂ モデル化合物の研究、NAD モデル化合物の研究、葉酸の研究に毎日頑張っています。

求ム、女の子!

「卒業論文題目」

- 中村かおり ラジカル置換反応を利用したNAD モデル化合物の合成
浜野洋平 Calixarene 修飾コバロキシムの合成
武藤信之 プロパルギル誘導体の三重結合へのコバロキシム付加反応
吉原隆夫 ビスー(ジメチルグリオキシマー)コバルト(II)錯体のESRスペクトルと配位子効果

◇新田研

「ヤッペー!!」

B4 高安 徹
“ベンゼン系芳香族化合物の合成、及びその性質の探索”に向かって、6人の男が日々、研究をしている。その6人とは……。欧州文化をこよなく愛すI氏(M1)、体格充分、スポーツマンのT氏(M1)、体重50kgのY氏(M1)、ゲームをやらせたら徹夜になりかねないH(B4)、ちびまる子ちゃんに出てくるハマジ君の声そっくりのY(B4)、中国人に間違えられた私。この面々が名簿上の構成人員である。しかし、PM5:00をすぎると、M研のMを筆頭に数名の男がやって来て、居すわる。

新田研の一日は、朝10時に始まる。廃液の処理、試薬購入、書類提出等の仕事をすませ、各自、自分のテーマに向かって実験を始める。午前中の研究室は大変に静かである。しかし、ハマジ君の一声で、この静けさは失われ、笑いの渦が巻き起こる?

ハ:ヤッペー!!

私:どうしたの?

ハ:ヤッペー!! またこぼしちゃった。回収しなくっちゃ。

彼が、新田研に来て始めて覚えたことが、モノの回収方法である。(エバポレーターを

分解して、モノを回収するとか……。) その他にも、分液ロートのうけのエルレン (三角フラスコのこと) からモノがあふれていたとか、分液ロートの中に、NaOH (固体) と水を入れて攪拌しようとした (解説: アルカリは、ガラスを融かすため、壁面を曇らせてしまう) とか、エピソードは山ほどある。

そして、午後5時をすぎると、M研のMがやって来て、I氏に変な話をしだす。内容はここに書けない様な事です。とにかく、午後になると、新田研から静かさは失われ、再び静かさを取り戻すのはハマジ君の帰る11時以降である (らしい)。

「卒業論文題目」

- 伊藤幸司 アズレン縮環1,6-メタノ[10]アズレンの合成と性質
富岡洋樹 架橋[11]アズレン構造を有する 18π 及び 22π 電子系化合物の合成
西村浩二 アズレノ[1,2-a]アズレン及びその誘導体の合成
山根教郎 アズレン及びベンゼン縮環トロピリウムカチオンの合成

◇ 松本研

卒業論文という必修科目が五単位もあるからには卒業するためにどこかの研究室に入って、そこでやっていかなければならない。縁あってこの研究室のお世話となることになったわけだが、配属されてすぐの頃はやり場がないのが困った。無機錯体化学という分野のため、無機物、有機物を問わず種々の試薬がめったやたらにおいてあり、その中には危険なものもたんとあるので、ぼけっと立っているだけでは能がないし、研究している人の邪魔なので肩を縮めて小さくなっているだけの毎日が続いた。とにかく自分の居場所を見付けるのに一月ぐらいかかった気がする。仕事の中味が基本的に合成屋だから研究といってもその殆どが実験である。頭を動かすよりも先に手を動かした方が結果は出る。したがって結果を出す努力をしていないのがすぐ目につく。

手の動かし方に文句をつけたりするような事はないが、全く手の動いていない人には冷たい。本読み等のいわゆる勉強会は、土曜日の午前中に論文紹介とNMRについてのゼミ

があるだけで、他に強制的にさせられる事はない。自分に必要な知識を必要な時に自分で調べるだけの事だ。この放任主義は全てに言えて、合成法も測定法も研究内容までもがかなりの部分で自由に選択できる。ただ、何をすればよいか皆目見当がつかないような場合は、上級生が丁寧に教えてくれるし、修士・博士の人たちも互いの弱い分野は補いあっている様である。先生も研究室の人たちも根本的にはいい人だから安心していられる。ノリも良い方なので研究室対抗野球大会や飲酒の時等は大いに盛り上がる。研究室内の雰囲気は、学生半分社会人半分といった感じで、全てが個人に委ねられている半面全てが研究室に管理されている。都合よくその辺を使い分けられればこんな良い所はない。間違うと悲惨だ。

慣れれば案外住み心地はいいのだけれども、多少の悪臭と完全週休一日制が玉に傷だ。

「卒業論文題目」

- 上村裕之 硫黄架橋配位子を有する新規ルテニウム二核錯体の単結晶 X線構造解析
須藤雅之 ニトロゲナーゼ活性部位のモデル錯体の合成と性質
水野和浩 白金ブルーを触媒とするオレフィンの酸化反応
渡辺剛英 硫黄架橋配位子を有する新規ルテニウム二核錯体の合成と性質

連絡事務室から

市村 照子

みなさんおくれればせながら初めまして
平成3年6月1日付で所属になりました。
どうぞよろしくをお願いします。

この会報が皆さんのお手許に届くのは平成
4年度も終わる2月とのことですので、以下
記した事と時期的にずれてしまいますがどう
かご了承下さい。

私が連絡事務室に配属になりまして、そろ
そろ1ケ年が過ぎようとしております。昨年
のちょうど今頃、異動（大学の定例人事異動
は6月と12月の2回ある。）が決まった時に
「連絡事務室とはいったいどんな仕事をする
職場なのだろうか」と私なりに考えました。

私の前の職場は本部キャンパスにある「情
報システムセンター」という所でしたので、
理工学部を外側から見ることになります。

まず、単純に一人職場と聞いておりました
ので色々な面で不便なこと、それと夏季休
暇・冬季休暇はとれるのだろうかと心ならず
も心配しました。さて仕事の内容ですが、業
務体制としては、大本の理工学部の事務所が
あり、その事務所もいくつかの係があり、そ
の1つの係のなかに連絡事務室が位置づけら
れている。そして、その各係単位から仕事が
おりてきて、それを処理する。また先生方や
学生の皆さんに処理内容等を連絡する。連絡
事務室という名称のとおり、業務としては「諸
連絡」が主たるものであると思いました。

1年間を振り返ってみて、業務体制は当初
考えたとおりにだと思っておりますが、業務内容は
種々ありまして、大きく分けると次の三項目
になります。

1. 学務関係業務
2. 予算管理財務処理関係業務
3. 庶務関係業務

です。この中で一番考えさせられたのが、2
の財務処理（各研究室から提出される物品購
入の請求書の処理）でした。最初は本部と学
部との予算の勘定科目の違い、それに伴う処
理の複雑さでして、一時は処理に手こずりま
した。今考えるとなんでこんな事で時間がか
かったのだろうかと思っております。ととも

に慣れぬために先生方や学生の皆さんにご迷
惑をおかけした事があるかと思いますが、こ
の場をかりましてお詫びさせていただきます。

結論といたしましては、連絡事務室とは、
1. 先生方、学生さんへの情報伝達の仲立ち
をする所で、
2. その業務をする「ミニミニ学部事務所」
ということになろうかと思われま

す。これからは、1年目より2年目、2年目よ
り3年目と徐々に慣れて、皆さんのお役に立
ちたいと思っております。どうぞ連絡事務室
をご利用下さい。

オリエンテーション感想

オリエンテーション参加者のひとこと。

サッカーもできたし、伊藤礼吉先生に会え
たし、先輩の話も聞けたし、早慶戦に行くよ
り良い体験をさせてもらった。 T・S

仲間たちとのお卓Qや硬式庭Q、さらには
ルービックQぶにまで及ぶ交流によって、
うんざりした雨を吹き飛ばせたと思う。

トシ

たった6時間弱の軽井沢滞在。卓球に明け
くれた時間だった。新鮮な空気がとても胃
にしみこみました。 み

19時13分高崎初の特急の中で車掌に新渡部
稲造を渡した時、このオリエンテーションに
それだけの価値があるのか悩んだが、帰りに
私はその夏目漱石に微笑んだ。 厳

中学生の時以来の久しぶりのサッカー、し
かも雨の中だったので印象深い。次の日の筋
肉痛がまたすさまじかった。 大

楽しみにしていたソフトボールができなく
とても残念だったが、その代わりに大雨の
中でのサッカーがよかった。また、夜に、教
授や先輩からいろいろな話を聞いて、とても
役に立ちました。でも、早慶戦にも行きたかつ
た。 K・Y

教授はんの話聞くより、先輩と仲良くな
れたのが一番の収穫です。木久蔵ラーメンは
ウマクなかった。 クニヒサ

たもつ先輩のヤッターマンの歌がとても良
かった。 マチダ

体調がよくないものの1時過ぎまで先輩方
と飲んだ。でも翌朝、朝食が食べられなかつ

た。
高宮先生の「軽井沢の歴史」の講話に感動した。

T・K

石内
講話を聞いている先生の姿を見て、先生もやはり人間だなあとしみじみ思った。

K・S

酒に酔った勢いで先輩の研究内容をききました。先輩の名前は忘れても、内容だけは覚えている。とても楽しいセミナーだった。

S・N

R
どうもありがとうございました。

学部生の声

●1年生

我々がキャンパスを歩み始めて早くも一ヶ月が過ぎ、ようやく新しい雰囲気に関人が溶け込んできたように見える。それに伴って仲間の輪もかなり広がり、様々な交流の機会を得たが、その中で一つの通念のようなものを掲げたのである。それは「華やかさを失わない」といったものであるのだが、このことは今の理工学部全体の目標のようにも感じられる。確かに我々は色というものを失い、モノトーン化してきている。しかしそれは各々の心掛け次第なのである。これからは我々の若さによって伝統の幅を広げ、また新たな拠点を築くことが大切だ。そのことは例えば交流場所の拠点を広げるといったような生活上の面はもちろんのこと、学問の世界にあてはまるものである。4年間という時間はあまりに短く、我々の努力の如何にかかわらず過ぎてゆくものだが、そうはいくものやはり、各人が向上心を持って生きており、何かを身につけたいと願っているはず。特にすぐれて現代的なものを見方をするならば、我々は経験値を高めることによって新しい世界を広げるために学んでいるのだ。そのためには4年間を無駄なくフルに生きねばならない。そこで、各拠点までの道標的なものが求められる。ひとことで言えば一連のマニュアルと言えるが、この稲化会を通してそれらを知り、早く現在の開発拠点まで進むことが出来るよう御協力願いたい。そして長い目で見て次回は、我々が先輩や世間の人々にこれを語り継ぐ使命にあることとなる。その時には次のことに

注意したい。それは化学と生活のつながりを重視し、専門家による難解さを控えた、わかりやすさを目標とすることである。もし我々がそれを実行すれば、世間の化学に対する理解を得るばかりでなく、我々の学問体系の整理の働きをなし、化学が以前より身近に感じられることとなろう。充実した学生生活を送るためにも、以上のことを意識して上手に生きてゆきたいと考えている。(土志田 剛)

●2年生

入学して早1年。時は水の流れるように止まることなく流れて行きます。2年生にもなると専門選択教科がぐいど増え、授業内容も1年生の時よりも専門的になります。最も楽しいのは実験、白衣を着た自分が別人のように見えます。それに実験操作もまるでお料理のようになかなかわくわくします。実験終了時に生成されるものが食べ物でないということを除けばお料理感覚で楽しめます。

授業も、分かりやすく教えて下さる先生もいるし、授業以外の雑談で楽しませてくれる先生もいらっしゃいます。早稲田の教授は三流とたかかれますが、それは主に政経学部のこと、化学科の教授にはまず当てはまることはありません。また、実験の時お世話して下さいるT.A. (ティーチング・アシスタント) さんも親切な方ばかり、化学科は本当に恵まれています。

●3年生

—ある学部生の1日—

朝は峰をふかすことから始める。今日は朝から気分がいい。おもむろに時計に目をやる—PM12:15。このままでは3限に出られるかも微妙だ。とりあえず家を出る。寝グセのひどい頭にタオルを巻いて、おやじっぽいその風体は、無精ヒゲもそのままに、まさに闊歩する熊。

さてと馬場の駅に降り立ち理工への坂を昇る。突然、彼は何者か強力な力を感じた。これこそ、化学科のブラックホール麻雀西武である。ここは時間の特異点であり、ここにいると、4年間が5年、6年、7年……と変わってしまう。一応彼の中にも葛藤が生まれる。「ああ、ここで負けたら数A (1年必修) が危ない……。」

そこには温かい仲間がいた。「そうさ、大学は何も4年と決まったものじゃない」今日も彼のドラ切りリーチがさく裂する。
※この物語はフィクションであり、化学科3年の宇都宮くんとは一切関係ありません。

●4年生

4年生は法律的には大人であり、実際社会でも来年度から大人になる。

よく、大人になれば広い視野が必要になると言われる。では広い視野はどうしたら身につくのであろうか。

本を読む、友達づき合いを広くする等。良く言われる方法であり、その通りであろう。

だが、実行内容に少々疑問を感じる。

例えば、理工の学読に人文社会系の本棚があり、そこには社会福祉関係の人には有名な「福祉が人を殺す時」という本がある。学読に行くとき々見るのだが、その本はいつも両隣の本と一緒に動いた形跡もなく全く同じ場所に存在する。つまりは誰も読んでいないのであろう。その本に限らず、総じて人文社会系の本はたいてい理系専門書に比べると、動いた(要するに誰かが借りた)様子もない。

人様々な理由はあるだろうが、理工に何百人と人がいて、理系以外の本等はほとんど読む人がいないのは少々問題ではないだろうか。「理系だから、実験が忙しかったから読んでません。」と言う様ではとても視野が広いとはいえない。

早稲田出身者は企業等で管理職になる者も多いと聞く。その様な人こそ一般教養が問題となるはず。又、そうした事を考えず、単に大人になるという事だけをとても社会的教養が必要と思うのだが、いかがなものであろうか。

●M1の声

M1というのはどうも中途半端な学年である。学部の4年生のときの1年間を研究室で過ごし、まがりなりにも研究というものを1年間見てきて、研究室での生活というものはどういうものかを知っている。また、修論というには、今一つピンとこない学年である。そういう学年ではあるが、遊んでばかりでいいわけがなく、やるべき事はきちんとやらねばならない。遊ぶ事は悪いというわけではな

いが、自分の時間を作りやすい学年ではある。

自分の時間に何をするかは人それぞれであるが、極端に言えば二つあると思う。つまり、目的を持って何かをやっている場合とそうでない場合である。目的を持たずに何かやっている場合は、他人の目には勿論、自分自身も無駄なことをしているなあという気になる。しかし、「無用の用」という言葉もある。いつどういう形で何か役に立つことがあるかもしれない。逆に、目的を持って何かをやっている場合がある。他人から見ても有意義に時間を使っているように見えるだろうし、本人もそう思っているかもしれない。しかし、ただの自己満足にならないように注意しなければならないだろう。

最近、自分の時間に遊びたいがために、ともすれば、仕事の時間まで犠牲にする人が増えているように感じられる。これはもう本末転倒である。自分の本分とは何かを再認識する必要があるだろう。日本では昔から影で努力することは美徳だとされてきた。美徳とまでは言わなくても、良いことだとされてきた。他人が見ると普段と変わらない生活をしているように見えるが、実は影で努力している。そういうのが日本人というのは昔から好きである。ちょっと前に雑誌を読んでいたら、頭の片隅に追いやられていたある言葉を思い出した。それは、「士別三日、即当刮目相待」である。こういうことの言える人間になりたいものだ。

●M2の声

今年も51号館の私が担当することになってしまった。各企業の皆様や他大学の皆様、そして65号館の皆様はお元気ででしょうか。皆様に共通のテーマがなかなか思いつかないので、極私的なことで恐縮ですが少し述べさせていただきます。私は卒論の時から ab-initio 路線をとっているためそれなりに厳密な変形を行うことができて楽しい。しかし精度の高い数値計算を行うにはどうしても扱える系の大きさが非常に小さくなってしまふ。今までのわたしの扱った系といえば、He 原子、LiH 分子、FH 分子といった、Z マトリックスが一瞬でできるものばかりである。個人的には分子分光理論に興味があり、最近行われてい

るような実験を理論的に考えてみたいと思うのだが、その辺の勉強がまだまだ不足ということと、また精度を要求してしまうとどうしても正確な断熱ポテンシャルが必要ということになり、結局電子状態の問題に戻ってしまうのである。電子相関の問題もそれなりに面白そうだが、それだけでは私にはつまらない。

修論も結局厳密性へ向かう話になってしまったが、いつか実験の方々にも面白いと思って頂けるような話をやりたいと思っている。

「卒業生短信」

卒業生の方からのお便りを御紹介します。

○第一期杉山浩 今も有機合成をしています。コンピューター化が進み、量子化学の勉強をやり直しています。

○第二期 櫻井唯之 遅ればせながら2月子どもが生まれ寝不足が続く今日この頃です。

○第四期 小又昭彦 3月に近大より博士を取得しました。石井聡 平成3年から5年間の予定でドイツへ行って居ります。坪川雅也 会社に入り、ポリプロピレンの重合(有機)→ポリホスファゼンの合成(半有機半無機)→ダイヤモンドの合成(無機)と職を転々と変えております。

○第五期 庄司和夫 幸か不幸かバブルの最中に公団が当たり、それから3年やっと我家が完成し入居しました。八王子の山でしばらくは転売もできず居すわりそうです。近くへお越しの折は是非お立寄り下さい。須藤芳明 マンションを買いました。山岡康子 昨年4月転居しました。以前の家のすぐ近くですが、ちょっと広くなって息子は大喜び。でも引っ越しは大変。体力も財力も使ってしまった。山田修 4月に結婚しました。仕事の方は入社以来ずっと半導体をやっています。

○第六期 加藤まさみ 昨年、ミサワホームへ転職しました。安井孝之 昨年5月大阪に転勤。バブルの後始末的な仕事をしています。日本経済の歪みを実感する毎日です。私生活では息子が昨年6月に生まれました。

○第七期 都築正則 昨年7月に研究所の大幅な体制変更があって、職場の名称が変わりました(出光興産(株)中央研究所)。と言ってもし仕事の内容は引き続き触媒開発担当で、

テーマもずーっと同じです。重野信一 毎晩帰宅が午前様になる警視庁担当から今年4月、やっと“解放”され、今は「遊軍記者」として、「脳死・臓器移植」「選挙」「災害」などを担当しています。5月に結婚しました。

○第八期 加藤剛弘 昨年11月結婚しました。鳥居善三 この2月に山々がきれいに見え、環境の良い田舎の青梅へ転勤し、何とか文明にしがみついています。井口教授の娘(英里)さんを含め、化学科OBの集う日立の半導体へ、後輩の皆様もいらして下さい!! 宮野浩行 都立大の近くに引っ越しました。

山崎秀子 1月に復職しました。今は仕事と子育てで大忙しです。ジャンケンで負けて、早々に保育園の父母会の役員になってしまし。横山寿敏 研究と教育の両立は非常に難しいことだと最近痛感しました。

○第九期 鬼久保俊一 現在、会社(東洋インキ)に在籍のまま、埼玉大学大学院博士後期課程の学生として理化学研究所で研究をしています。須藤一典 仕事に忙しい毎日です。十時信太郎 東京研究所のSRC 5階に2年連続して「稲化会」メンバーを迎えることになりました。昨年は高橋研の坂田さんの元気のいい声とフロアを勢いよく走る音のおかげで、午後におそいかかる睡魔を振り払うことができました。今年入った元新田研の赤荻君がどう活躍するか今から楽しみです。(花王化粧品研究所)長谷川敦子 職場が引越して1年、いまだにダンボールが目につくせまくるしさにも慣れて、今はパソコン遊びを喜んでやっています。

○第十期 美野真司 光導波路用ガーネット薄膜の研究に従事しています。あとはもっぱらテニスです。

○第十一期 大島拓人 本年2月に現勤務先(住友銀行東京営業第一部)に転勤となりました。NEC、東芝、日立、富士通等、電機メーカーを担当しています。支店勤務とは違った意味で忙しく、日々残業です。境野佳樹 社会人となって、はや3年が過ぎてしまいました。最近思うことは、「技術屋はワガママに生きるべし」「化学とは、原因と結果の因果関係を帰納法、演繹法を用いて論ずる哲学である」ということです。高橋建志 5年ぶりに東京へ帰ってきました。今年より家業の医療・光学用特殊電球製造・営業に従事するこ

とになりました。皆様、御指導の程宜しくお
願い致します。田中久雄 夏頃に寮を出る予
定です。森成夫 仕事の関係で1年程前
からパリで生活しています。香料の研究
(調香)を行っています。'93年の正月は
日本で迎えられるそうです。

○第十二期 郡司幹夫 毎日が充実して
います。教育者になって良かったと思っ
ています。生徒たちの笑顔や満足した
顔が、私に対する最大の報酬です。

○第十三期 長澤裕 人生は年々苦しい
方へ苦しい方へと流れてる気がするな
あ。とうとうおれもD2になってしまっ
た! う〜む。古瀬礼子 6月、無事イ
ギリスでの3年間の留学を終えて帰
国しました。今村元泰 5月結婚しま
した。坂田久美子 就職して2年目
になりました。気付けば、先輩と思っ
たら、グループに新人が来ず、今年
は新人と2年目の二足のわらじをは
いて仕事をしています。長谷川健 関
西がこんなに居心地良くなるとは当
初は思いませんでした。今では東京
が少し恐ろしい。光畑孝典 社会人
になってはや1年が過ぎ、仕事の方
もようやく一人前にこなすことが
できるようになりました。マイペース
で元気にやっています。

○第十四期 石上嘉康 '91年度は講
演3つ、共/単著論文4つ書きました。
その中の1本で第2回大川賞をもら
いました。92年4月よりD1兼学振
特別研究員です。柴崎浩一 現在、
当社(関西電力)では技術課化学係
の廃止、ならびに業者委託の噂が
あり、ちょっぴり先行き不安を感
じる今日この頃です。

○第十五期 此木敬一 サメのきらい
な天然有機化合物の生理活性発現
機構について研究しています。佃直
子 東京銀行システム部で、毎日
プログラミングに励んでいます。吉井
啓人 1日1000トンテレフタル酸
を作っています。知らないことだら
けですが、一所懸命がんばって
おります。

○第十六期 木下浩一郎 現在現場
実習をしていますが、不景気のため
、現場作業があまりなく、少々ひ
まな状態です。

○博士号取得者(1983年) 鈴木一
成 文系の学生にcomputerを教
えています。早稲田では化学基礎
実験を担当しています。研究領域
は計算物理、計算化学(量子化学)
です。

稲化会より

今年より稲化会の名簿のシステムが
変更になりました。変更のさいに間
違いのなきよう、注意を払ったつも
りではありますが、訂正箇所を見
つけられた方は稲化会まで御連絡
下さい。毎年の事ではありますが、
特に今回は訂正すべき箇所が多い
と思いますので、何ぶんよろしく
お願い致します。

尚、名簿のデータの中には、現住
所・帰省先・勤務先の住所、郵便
番号、電話番号等も入力されていま
すので、なるべくこれらのデータも
稲化会までお寄せ下さいよう、
重ねてお願い申し上げます。

又、稲化会の名簿にみな様が安心
して個人情報を送って下さいます
よう、名簿の管理には充分お気
をつけ下さい。なお一層の御協
力をお願い致します。

稲化会会計報告

—1991. 4. 1～1992. 3. 31現在—

	前年度繰越	1,782,749
【収入の部】	会費	128,250
	計	1,910,999①
【支出の部】	印刷費	25,750
	消耗品費	555
	通信費	74,155
	雑費	256,371
	計	356,831②
	次年度繰越①-②	1,554,168
		(単位・円)

お 願 い

- 自由投稿、新企画を募集しています。
〒169 新宿区大久保3-4-1
早大理工学部 化学科事務室付
- 稲化会費を納入して下さい。
正会員 1,500円、学生会員 750円。なお
終身会費は30,000です。
最近滞納者が増えております。きちんと
払って下さい。

稲化会役員

会 長	高宮信夫		
副 会 長	長瀬 裕		
監 事	井口 馨		
評 議 員	井口 馨	伊藤紘一	
	伊藤礼吉	高橋博彰	
	高宮信夫	多田 愈	
	新田 信	松本和子	
	石原浩二	長瀬 裕	
	矢野圭一	中山 匡	
	小又昭彦	井上国見	
	宮田信郎	百瀬 浩	
	小林憲裕	宮野浩行	
	伊藤信一	塚田光男	
	境野佳樹	小西隆太郎	
	朝倉徹也	泉千英子	
	神崎昌之		
	新田 信		
会計理事	松本和子	石原浩二	
庶務理事			
学生理事	M 2	五十嵐庸	岡美由紀
	B 4	飯田直人	上杉有紀
		志賀律子	高橋 誠
	B 3	井上 彰	塚本ひろ子
		長坂律子	森川 毅
	B 2	笹島秀樹	塩野由紀
		鈴木賢剛	野口由木
	B 1	織田有美	榊田 剛
		柚沢良介	水野 操

〈編集後記〉

稲化会役員の学生理事の所を見て下さい。
去年まで稲化会を支えて下さった先輩諸氏が
全員卒業され、今年は指導して下さる方もな
く大変でした。ドタバタとようやく発行にこ
ぎつけたあ。という気分です。又、今年は名
簿システムの変更により数々の方から援助を
受けました。誠にありがとうございました。